

## &lt;書評&gt;

渡辺幸倫 編著

『多文化社会の社会教育—公民館・図書館・博物館がつくる「安心の居場所」』

明石書店 2019年3月

石川敬史（十文字学園女子大学）

安心の居場所——「国籍や出身地、あるいは民族的差異にかかわらず、それぞれの幸福を追求することが保障され、その追求のために適切な支援を得たり、仲間と出会ったりすることができるような場」(p.13) ——を創出している公民館、図書館、博物館の活動を紹介し、社会教育の新たな可能性を提示することが本書の目的である。すなわち本書には、国内で「多文化多民族化」が加速するなか、「社会教育は何ができるのか、具体的な行動が迫られている」(p.10) という編者の問題意識のもと、自治体や社会教育施設の職員、NGOスタッフ、小中高の教員などに向けて、実践に対する示唆を与え、新たな取り組みに向けて提案可能な要素や考え方を吸収してほしいという意図が込められている。

本書の構成として、まず第Ⅰ部においては、地域全体の多文化化という視点から東京都新宿区と静岡県磐田市における「横断的事例」(p.22) を紹介している。第1章では、先駆的な外国人集住地域である新宿区において、図書館、博物館、日本語学校などが連携しながら「安心の居場所」を創出する過程と意義を考察している。第2章では、ブラジル人住民が増加している磐田市南御厨地区を事例に、自治会組織、公民館（現・地域交流センター）、行政等を通じた活動を紹介し、日本人も含め地域全体の生活ネットワークに根づいた活動の重要性を指摘している。

続く第Ⅱ部から第Ⅳ部では公民館、図書館、博物館の事例がそれぞれ紹介されている。これらの各部では、まず国内の事例が取り上げられたうえで、アジア地域の事例と、これまでに紹介されることが少ない海外の事例を選定したという。第Ⅱ部の第3章では埼玉県川口市の芝公民館を事例として、トルコ国籍クルド人難民申請者と地域住民との文化交流を検討している。第4章では、韓国の社会教育・生涯学習と多文化家族支援という2つの法体系を踏まえ、光州広域市の平生学習館と多文化家族支援センターの事例を、続く第5章では、フィンランドの移民統合政策の一環であるフィンランド語教育を中心に、フォーマルとインフォーマルな学びの場の事例を取り上げている。

第Ⅲ部（図書館）では、第6章において公立図書館の多文化サービスの歴史と現状を整理したうえで、新宿区立大久保図書館の事例を紹介し、図書館が「安心の居場所」であるための提言をしている。第7章では多民族国家であるシンガポールを事例として、統合と

共生を重視する同国の歴史的背景を踏まえ、両者の視点から図書館サービスを取り上げ、第8章ではデンマークの図書館を事例に、移民・難民に図書館サービスを届ける仕組みや課題解決を支える多様な図書館プログラムを紹介し、特徴を考察している。

最後の第IV部では、まず第9章において国立アイヌ民族博物館の開館を念頭に、地域と学校との連携を事例として、民族に関する活動を行う博物館の協働と連携の可能性を考察している。第10章では、台湾原住民の歴史を踏まえ、順益台湾原住民博物館が果たす役割を検討し、同館が原住民の伝統文化の「安心の居場所」であることを指摘している。第11章では、ニュージーランド社会全体の課題でもある太平洋諸島移民らの「安心の居場所」を確保することを念頭に、同国における2館の博物館の取り組みを紹介している。

本書の執筆は12名にも及び、多文化教育、生涯学習・社会教育、国際関係論、図書館情報学など専門も多岐にわたる。よって、本書の特徴は、各章で取り上げられるさまざまな事例が単なる施設としての活動紹介に留まることなく、制度的背景や地域社会の現況、社会文化的背景、積み重ねられた歴史などを踏まえ、「安心の居場所」の意義と創出される過程の重要性を描いている点である。同時に、執筆者が各地域や施設を実際に訪問して具体例を検討していることは、実践を担う読者に対し示唆を与え、個々の地域の実情に沿った実践の創出につなげたいという本書の意図を感じる。とりわけ第1章において、川村千鶴子による長年の調査と論考を基盤に、親密圏の拡大と公共圏との繋がり・重なりから「安心の居場所」を検討していること、加えて「安心の居場所」を支える4つの要因を提出していることは興味深い。さまざまな施設・機関による「安心の居場所」の創出が、ライフサイクルを視野に取めた地域内発的な多文化共創の基盤になることは、まさに同書の軸である。この点について、川村の著作<sup>(1)</sup>を一読すると理解がさらに深まるであろう。

その一方で多彩な執筆者であったためか、実践の背景となる歴史、制度、地域の実情等の扱いが各章で異なっていたこと、公民館、図書館、博物館における専門職の役割が触れられていなかったこと、「公民館・図書館・博物館がつくる『安心の居場所』」に関して、学びあいを基盤とする社会教育としての新たな可能性が十分に論じられていなかったことなどの課題もあろう。実践例を取り上げるのであれば、同時に、実践を背負う担当者の声(課題や展望など)も聞きたかったという希望は、評者の欲張りであろうか。

かつて、同じく書名に「公民館・図書館・博物館」が刻まれた図書<sup>(2)</sup>がある。同書の「はじめに」には、3館の「おたがいの理論と成果をどのように交流し、共有できるか」、「役割を分かちあい、連携・協力の密接な網の目をつくりあげる責務がある」とある。本書によって、社会教育施設をはじめさまざまな機関や住民同士のつながりにより「安心の居場所」が創出される過程に一層の関心が高まるであろう。本書には、これまでに触れられることが少なかった事例が豊富に取り上げられている。国際的視野から一人ひとりの実践を相対化し、現場で行動するためのヒントが本書に詰まっている。

注

- (1) 川村千鶴子、『多文化都市・新宿の創造：ライフサイクルと生の保障』、慶応義塾大学出版会、2015年。
- (2) 小林文人編、『公民館・図書館・博物館（講座現代社会教育VI）』、亜紀書房、1977年。